

MY AUTUMN PART 1

バースデーカープはマディーヌ湖からの贈り物

スパイダー・ アイランドの秋



コイ釣りが人生で最も大切なものとはいわない。
しかし、私たち釣り人にとっては人生そのものである。

マックス・ノラート (ドイツ) = レポート
Reported by Max Nollert

スパイダー・アイランドの秋



最初の釣り旅行は夏のような暑さの9月だった。コイの気配が全く感じられず、厳しい釣りとなった

マディーヌの難題

私は秋のコイ釣りが何よりも好きである。特に大きな湖の秋はいい。風や冷え込み、あるいは嵐から私を守ってくれる小さなテントの中で過ごす時間がたまらないのだ。大きな湖のほとりでキャンプしながらコイを釣る。それが私のスタイルだ。

誰にも熱くなる趣味があるように、私はコイ釣りに人生を感じているし、コイ釣りのなかにこそ、本当の自分がいると思う。

ただし、そこは釣りである。驚くほどの釣果に浮かれて帰ることがあるかと思えば、釣果がなく再び釣りに行く気力さえなくすほど落ち込んで、モーゼル川の近くの住まいに帰ることもある。

一昨年、私はフランスのマディーヌ湖に友人とチームを組んで4回釣りした。いずれも4~8日間の旅だった。場所は私が10年前に1日だけ釣りをしたことがある所だ。

いずれも仲間とペアでの旅行だったが、友人は2人ともそこで釣りをするのは初めてだった。私たちはすばらしい時間を過ごした。再びこの湖を訪れる時は、あなたも一緒にいかがだろうか。

私の釣り旅行を語る前に、簡単に概要を書いておこう。

私は秋のシーズン、1100ヘクタールの広さを持つマディーヌ湖に、延べ20日間滞在したことになる。そのうちの10日はアタリがなく、魚を釣った

日が6日、魚を掛けたが逃してしまった日が4日あった。

この釣行で天国と地獄を味わったといつてよい。

湖にはものすごい数のムラサキイガイが生息していた。私が今まで釣りをした場所では見たこともない量だった。そのほかにも障害物が多く、根掛かりがひどかった。

結果は5kg、17.5kg、21kg、22kg、22.2kg、

24kgそして25.5kg。20日間でたったの7尾である。しかし、物語は期待を裏切らない。皆さんが想像する以上だと思う。

一般的な釣り方でこの湖を攻略することは不可能だった。水深7~8mの水底まで石がびっしりで、仕掛けを落とせば必ず根掛かりしてしまう。延べ36~48時間は根掛かりと格闘したはずだ。

この湖の支配者はまぎれもなくムラサキイガイ。時にはリグチューブでさえ、イガイの殻によって切

荷物の積み込みも完了。さあ釣り旅行の始まりだ。期待でやや興奮気味の私であった



左/霧が湖面を走り始めた。私たちはアシの前に釣り座を構え、ボートでアタリを待った 右/調理場専用のボートで腕をふるうコック長のレネ・レックス



られてしまった。底は石や枝など、地上にあるあらゆるものが敷き詰められていた。私は今まで、こんな場所で釣りをしたことはなかった。それまで私はハリ先がストレートのハリを使っていた。しかし、岩場のコイは口が非常に硬いので、ハリ先が内側にカーブしたハリが適している。私は仕掛けを含めたすべてを見直し、最適のものを使わねば

日の6日間。今回は友人のレネ・レックスと一緒にである。釣り場は広大な湖だった。この湖は9月になると水門が閉まり、水量が安定するから、釣りには絶好だった。

2~3kmの区間を、ボートに乗り魚探を使って調査した後、私たちはアシ原に滞在し、沈木をね

らって釣りをした。私たちが用意した「260m・iボート」は長期滞在が可能だ。小型の「160m・iボート」はタックルの運搬や調理場専用とした。午後にはサオも完璧にセットし終えた。釣り場から観察した感じは悪くなかった。翌朝まで湿気が高く、冷たい霧が出るようだ。期待は高まっていた。

しかし、状況は思ったほどよくならない。風は全くなかった。翌日も気象状況は変化しないようだ。私たちは深場をねらえる場所に移動し、食事の支度をしてから、ゆっくりと釣りの準備をした。

数時間かけて釣り場を探り、第一候補のポイントをGPSに記録した。こうすることで、長年、正確に同じポイントで釣りをすることができ、結果もついてくるのだ。



こちらはコイのための食事を用意するレネ。深場に効果的と思うエサを使った

AUTUMN

空はますます晴れ渡り、真夏のような日差しが降り注いだ。こうなるとお手上げだった

ならないことを学んだ。今回紹介するのは、逃げた魚を釣りあげたという幸運な物語だ。24kgのコイはイト切れでバレたかに思えたが、ハリはアゴにがっちり掛かっていた。切れたイトの端を見つけ、結び直して魚を釣りあげたという不思議体験だ。フィナーレは、太陽がまぶしい穏やかな11月末の午後、帰り支度をしている時に釣れた25.5kgだった。やはり秋は最高である。それでは4度の釣り旅行のうち2回分のエピソードをパート1として皆さんにお届けしよう。

Trip1 旅は始まった

すでに9月末になっていた。日程は9月20~25



スパイダー・アイランドの秋



朝起きると、周囲はごらんのとおり。我々はスパイダー・アイランドと命名した

数千の訪問者

翌朝、目を覚ますと、すごいお客がやってきていた。夜の間、私たちのテントの周囲を芸術的なネットで取り囲んだ張本人は、何千匹というクモだ。1cmの隙間もなかったが、テントには直接、巣を張ってはいなかった。クモは我々の体温を感じて距離をとったのだろうか。

朝露によって濡れた蜘蛛の巣アートが印象的だった。しかし、いくら芸術的で技術的にすぐれていようと、釣果には結びつかない。取りあえず、この島を「スパイダー・アイランド」と命名した。

次の日は前日とは違って変わって曇りひとつなく、とても暑かった。私たちは、もっと秋らしい天候になってほしいと願った。夏休みだったら最高という陽気だ。

約1.4mのナマズが2尾、退屈しのぎに掛かっ

てくれた。待ちぼうけの我々を氣遣ってくれたのだろうか。しかし、心は満たされない。コイの気配は全くないのだ。

弱り目にたたり目とはこのこと。帆船の長い舵でミチイトを切られてしまい、新しいイトに巻き替える羽目になった。悲しいかな、その日の主な出来事といえばこれが最後だった。

その後は何も起こらず、気分的にも疲れ果ててしまった。私たちは、秋らしい気候になったら、



左/2尾のナマズが我々を慰めに来てくれた。1尾をレネが持って記念の1枚 上/帆船にミチイトをやられてしまった。スプールに新しいイトを巻く私 下/早朝の霧は幻想的だが、やがて強い日差しが照りつける予兆だ。我々は家路につくことにした。最初の釣行は幕を閉じた



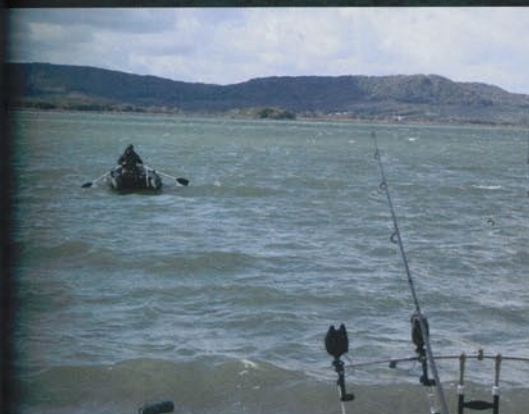
上/再チャレンジ。待ちに待った秋がやってきた 下/嵐を歓迎してトシュテン・フェイルが叫ぶ。ウエルカム・ストーム!

再び訪れることにして、荷物をたたんだ。

釣果に恵まれなかったが、釣り場の調査という面では成果があった。また作戦を練り直し、次は必ず結果を出したい。

Trip2 嵐のなかの再挑戦

2度目の挑戦は10月4~12日の期間で、トシュテン・フェイルとの釣行だ。



上/私たちの装備は、どんな厳しい天候にも耐えることができる 右/トシュテンに魚が掛かった。その向こうには虹が架かっていた

私はモーゼル川近くの自宅で、いつでも出発できる状態にあった。釣行前の数日は細心の注意を払って天候をチェックしていた。何かが起こりそうだった。400kmほど離れた湖でも変化の兆しがあるようだった。

出発する時、ドイツの気候はまだ秋らしくなかったが、数時間もあれば変わるに違いない。嵐が西からやってくる。長時間にわたって荒れるだろう。

私が湖に着いた時点では、まだ真夏のような暑さだった。前回、レネと訪れた際、私は秋の釣りをイメージしていた。今回は大好きな秋が来る。

私はすぐにサオをだすことはしなかった。ロッドポッドにはまだサオは乗っていない。今はチャンスを待つのだ。

ポイントには最適なタイミングでエサを入れるつもりだ。その見極めがすべてである。前回の釣行から2週間半。最初の積乱雲が近づいていた。勝負の時がやってくる。

初日はナマズのアタリひとつなく過ぎた。風はますます強くなってきた。

釣友のトシュテンが到着したのは午後だった。彼も私も、これからの日々をすごく楽しみにしていた。

私たちはコイのためにすばらしいエサを用意していた。しかし、大量のエサを湖に投げ込むことはしなかった。たくさん撒くことができたとしても、やたらとエサを撒くことはしない。

トシュテンは家でバケツを濡らしてしまい、ボイリーがふやけて軟らかくなったようだが、問題はない。エサはしっかり計算されている。うまいコーヒーに余計なものを加える人はいないだろう。ミルクや砂糖はコーヒーの味を消してしまう。エサに求められるのは素材の持ち味だ。少しずつ、じわじわと溶け出す。私が強調したいのはそこである。

テントはバタバタと音を立て、地面に打ち込んだベグが吹っ飛ばすほどだった。外はよい状況だ。にもかかわらず、まだアタリはない。天候は2日目から予想どおりに展開し、大荒れで雨が叩きつけている。当たってもよいはずだ。

夜、私たちはサオの横に立って、アタリを待ち続けた。7.5kgのきのこ型のアンカーによって、ボートは岸から流されることはなかった。ボートは大波の上で揺れ動いていた。

私たちが食うだろうと期待した時刻を過ぎ、翌日の昼になっていた。



スパイダー・アイランドの秋



うれしい重さだった。重さと感動の両方によって、ゆがんだような笑顔となる

やったぞトシュテン

トシュテンのアラームに小さな反応があった。引き込みを待ち続けること10分。サオ先が小さく動いたかと思うと、電子音が響き、トシュテンは飛び上がってサオを手にとった。「来たぞ！」

強風の中、彼が叫んだ。私たちは、ついにすばらしい場面を撮影することができた。コイであることを確認した時、うれしさがこみ上げてきた。

重さを量らなくても、ひと目見て20kgはあることが分かった。すごいぞトシュテン。最高のスタ

ートではないか。

アズマティック・スパイス・ボイリーは浸透性で、軟らかくなくても2日間ポイントに残り、アタリを待つことができる。トシュテンは、エサがヘアにしっかりと付いていると信じていた。

トシュテンが180mもの距離を寄せてくる間、コイはほとんど暴れなかった。おそらく水温が高いせいだろう。

なぜ、天候が変わってから3日後に初めてのアタリがあったのかも分かった。魚の活性が低く、食いがなかったのだ。それがようやく目覚めたのだ。

我々も一気にやる気が起きた。GPSの助けを

借りて、新たなサオをポイントまで持って行き、正確にエサを落とした。

ここが勝負どころ。「確実に掛けて、必ず獲る」という我々のモットーにしたがって、攻勢に転じた。すさまじい強風だったが、タックルは全く問題がなかった。そして24時間後、次のサプライズが訪れた。

同じエリアに入れたトシュテンのサオに、22.2kgの魚が食ったのだ。その美しい魚は何もなかったかのように岸に寄ってきた。

天候が変わる前は食ってないから、すべての魚は腹をすかせている。まだまだ釣れ続くはずだ。

水温は15.9℃まで下がっている。このまま下がり続けるだろう。

天候は荒れまくっていた。恐ろしい雨が真正面から体当たりをしてくる。この日で帰らなければならないトシュテンは、ボートで帰る途中、痛いほどのシャワーを浴び続けることになった。



私たちの160m・iボートはいろいろな状況に対応できる設計だ。コイのベッドにも早変わりする

トシュテンのために湖がくれたミラーカーブ。フランスにおける彼の獲物第1号だった



ひとり残った私のスタートは22.2kgのミラーカーブだった。すばらしい魚だ



雨と風が真正面から迫ってきた。大ものの期待がますます高まった

しかし前日、彼はすでに経験済みなのだ。ウェーダーを履いたまま、岸際の深さ80cmの水中に転倒し、ずぶ濡れになっていたのだ。

ひとりの闘い

トシュテンが去った後、雨をしのぎ快適に過ごすため、テントをしっかりと張った。

すべて順調、絶対うまくいくと、空気の中の何かが私に話しかけた気がした。

今、ビッグワンがエサを食べている。そんな映像が頭をよぎった。

はるか沖で、テントベグによって仕掛けはしっかりと水底に打ち付けられている。絶対動かない。完璧なはずだ。

午後になると、友人のディラン・ボルトが応援に来てくれた。彼のホームグラウンドはデア湖、この湖では釣りをしたことがない。

リキッド・パウダー・ペーストを使ったクワセの作り方を実演したりして、時間をすごした。そのクワセは、明日、私が使うものだ。

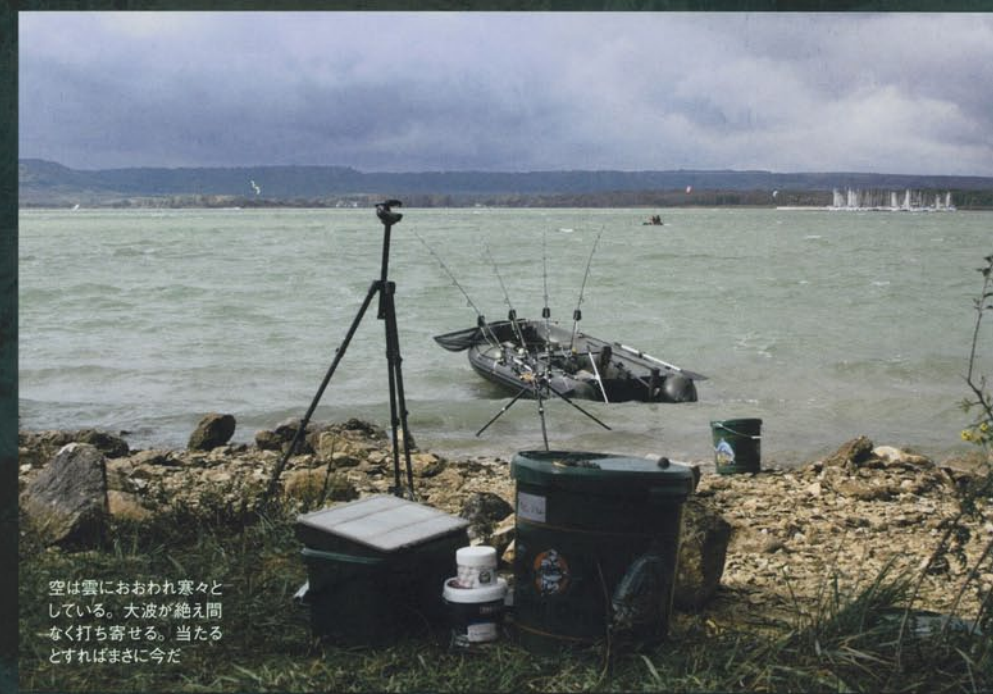
ディランが帰った午後、私はすべてのサオを打ち替えた。2〜3時間以内に何かが起こるという確信があった。

その夜は闘いの連続だった。私は1分たりとも眠らなかった。こっちに当たり、隣に当たりと、連

続してイトは引き出されたが、ハリがはずれたり、ミチイトが切れたり何度バラしてしまった。

これは大成功の夜といえるかどうか。しかし、朝を迎えた私はハッピーだった。カーブサックには22kgのミラーカーブと24kgのコモンカーブが入っていたからである。

締めくくりは、その24kgのコモンカーブを釣った時の物語にしよう。



空は雲におおわれ寒々としている。大波が絶え間なく打ち寄せる。当たるとすればまさに今だ

スパイダー・アイランドの秋



嵐の中で釣りあげた180cmの大ナマズ。リキッド・パウダー・ベストで作ったボイリーを食ってきた



前夜に釣れたミラーカーブは22kgの華麗な魚体であった

幸運、不運、そして幸運

逃した魚は、このドラマを盛り上げるための一場面といえるかもしれない。

クライマックスは突然やってきた。ミラーカーブの時と同じようにミチイトは激しく走って行く。私はボートで沖へ向かった。魚まであと半分の距離という時、突然イトが切れてしまった。水草に付いているおびただしい量のイガイのせいだ。

間違いなく大ものだ。私はコイを追うことをあきらめなかった。かなりの長さの切れたミチイトが水中を漂っているはずだ。私はこの時、ミチイトを救出するための回収アンカーを持っていなかった。したがって、イトが切れた直後、サオをできるだけ水中深く差し込んで2~3mの円を描くように動かしながら、ボートを進めた。

サオを持ち上げると、切れたミチイトが巻き付いていた。この特殊なブレイドラインの長所は、常に引っ張られているように水中で漂うことだ。

私は、切れたイトとサオから伸びたイトの両方の端を結び、ファイトを再開した。

なんとという幸運か、まだ魚は切れた仕掛けに付いていた。魚は底なしのスタミナで粘り強く闘いを挑んできた。

しかし、幸運の神は私に微笑んだ。魚はネットの中で巨大な影となっていた。



リキッド・パウダー・ベストは水中で一昼夜経っても残るエサに仕上がる



私の仕掛け。ミチイトが切れても、この仕掛けのおかげでビッグワンを手にできた

最高の瞬間と痛恨のバラシ。昨夜から短時間で両極端な体験をした。不思議な気分だった。残念なのは、この12時間で3尾のデカゴイをバラしたことだ。

ただし、バラした魚はいずれも、1時間もすると同じ場所に戻ってきた。それは大荒れの天候のせいだろう。

ビッグワンはエサを食べ続け、私は眠る時間もなく、ゴムボートを何kmも漕がなくてはならなかった。100年コイ釣りをしている、このような経験はなかなかできないだろう。

コイと私の対戦は3勝3敗の接戦となった。

朝、私がセルフタイマーを使って写真を撮ろうとしていると、トーマス・ブレイゼックとヤルダが偶然やってきた。これは大助かりだ。この写真は釣り旅行のすばらしい記念となった。

しっかりアタリをとることができて、夜釣りは大成功に終わったが、この日の午後、私は作戦を変え、場所を移動することにした。もっとコイに接近したかったのである。

ちょうど天候が落ち着き、釣り場は静けさを取り戻していたから、場所変えをするにはよい機会だった。荒れ続けていたら迷いが生じただろう。

風も天候も元に戻り、サオはロッドポッドに静かに横たわったままだった。嵐は去ってしまった。

巨大な魚のおいを求めて旅は続く。それは次の機会に紹介することしよう。

Profile
マックス・ノラート Max Nollert
 ドイツ在住。
 ボイリーをはじめとする総合釣り具メーカー、インベリアルフィッシング代表。ワールド・カーブ・カップでは大会プロデューサーを務める。数々の記録魚を釣りあげた巨ゴイハンターとしても知られる。



眠れぬ夜が明けた。夜通し動き回ったせいか、昼と夜が逆になったようであった。私も逆さまになってみた